

H30年度 総括コメント (音楽学部)

| 専攻・コース名 | 職名 | 氏名 | 総括コメント |
|---------|-----|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 作曲 | 教授 | 久留 智之 | 研究ではここ数年取り組んできたギター独奏曲(組曲)が完成した。(本年中にCD化予定)またリコーダー二重奏曲もCD出版された。教育活動では「和声」や「楽曲分析」などの基礎的理論科目を担当し作曲専攻として取り組んでいる基礎教育改革へのフィードバックを心がけた。大学運営では県芸の将来の方向付き絵に関わる委員会に多く関わることとなり、単に大学内の視点からの視点だけでなく日本における数少ない公立の芸大としてどのようにあるべきかという観点から意見を述べるように努めた、 |
| 作曲 | 教授 | 小林 聡 | 全ての項目について、継続的に努力を続けたと思う。本学の国際交流に関して、タンペレ応用科学大学とのMOU締結と交換留学制度の開始、UCSDとの交流のほか、作曲コースによる海外のアーティストの招聘の際には、自身が相手方との窓口となり、計画を進めた。またNHK文化センターでは、専門分野の研究を活かしながら講座を続けた。大学の社会貢献を進めるために、本学の一教員として、積極的に関わることができたと思う。 |
| 作曲 | 教授 | 山本 裕之 | 研究・教育活動については予定外の活動も含めて概ね順調に行っている。特に「和声学」の教材作成については、実際の授業に導入し検証する作業を継続し、また識者や部会の意見を取り入れながら順調に進めている。 |
| 作曲 | 准教授 | 成木 理香 | 今年度は、概ね目標を達成できたと言える。また、論文がイギリスの大手出版社Routledgeから発行されたことが大きな出来事であった。しかし、大きなクラス授業を責任者として担当しつつ、専門の教育、自身の作曲、研究、加えて大学運営のための委員会その他、すべてが大事な仕事であるが、あまりにも時間が足りない。 |
| 音楽学 | 教授 | 井上 さつき | 年度当初に計画したことはおおむね実施できた。特に2年目を迎えた「病院アウトリーチプロジェクト」の実施に関しては尽力した。その反面、時間的な制約のため、科研費Cの研究が思うように進まなかったこと、単著の準備が遅くなり、出版社に迷惑をかけてしまったことは残念である。 |
| 音楽学 | 教授 | 安原 雅之 | 本年度は、学長特別研究費を得てロシアで調査研究を行うことができた。今後、その成果を発表していきたい。 教育活動、大学運営、社会貢献について、任務を果たすことができたと思う。 |
| 音楽学 | 教授 | 東谷 護 | 就任1年目に、教養系の学術書籍を編著者として2冊上梓したこと、韓国・翰林大学から国際シンポジウムに招聘された他、国内の大学ではシンポジウム1回、講演2回(これらは全て招聘)を行った点においては、新しい研究教育環境の下での成果なので、高く評価できると思われる。来年度以降はより高次元で研究教育を行うことができるように、健康に留意したい。 |
| 声楽 | 教授 | 戸山 俊樹 | 毎年の事であるが、4つの項目のうち、研究活動だけが疎かになっている。 来年度こそ、少しでも改善するべく努力したい。 |
| 声楽 | 教授 | 末吉 利行 | すべての項目において、著しい成果を達成できたと思う。大学の運営は当然大切であるが、それに加えて一般市民の方達との関わりも重要である。私は在職中、ずっとこのスタンスで行動しており、これから益々必要になってくると考えている。残り1年の在職期間だが、最後まで貫きたいと考えている。 |
| 声楽 | 教授 | 中巻 寛子 | 教育活動、大学運営活動に関してはひとつひとつの事案に全力で当たり、一定以上の成果を上げ得たと考えている。しかし、その一方で、今年も自分の研究のための時間を確保することがますます困難となり、一部に未完のまま終わったものがあつた。電子メール等の発達により、曜日、時間、時期を問わず発信されてくる様々な連絡、依頼をいかに処理して、研究時間を確保するかが近年における最大の課題である。 |

H30年度 総括コメント（音楽学部）

| 専攻・コース名 | 職名 | 氏名 | 総括コメント |
|---------|-----|--------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 声楽 | 教授 | 森川 栄子 | 本年度は自己の研究発表の機会を得なかったが、将来的な機会へ向けての研修、ならびに学生その他への指導に力を注ぐことに重点をおき、特に後者においては数多くの成果を挙げることが出来た。また大学運営面における役割にも力を注ぐように努めた。 |
| 声楽 | 准教授 | 川島 幸子 | 研究活動（演奏活動）の充実が、教育活動の充実につながることを実感した一年だった。 また、大学でのレッスンや授業、大学運営と並行して行う日々の自分の研究時間（練習時間）の確保が難しい中、計画的、効率的に4つのソロリサイタルと3つのコンサートの準備・練習が出来、とりわけ、4つのソロリサイタルはすべて違うプログラムで挑み、演奏出来たことは、自身にとって大きな成果だった。大学運営の面では、桃子基金を利用して「平野和バスバリトンリサイタル」を企画・招聘・運営等を担当。私の友人でもありウィーン・フォルクスオーパー歌劇場専属歌手の平野さんの招聘し、学生たちにとって、ヨーロッパの歌劇場で歌う現役のオペラ歌手の声・演奏に生で触れることが出来る絶好の機会となり、また平野さんから直接話を聞くことが出来たことは、大変有意義で刺激になったに違いない。また、アーティストインレジデンスとして、「宮廷歌手ジュリー・カウフマン女史によるマスタークラス」を企画・招聘・運営・通訳等を担当。ベルリン芸術大学声楽科教授で長年バイエルン国立歌劇場専属歌手だった宮廷歌手ジュリー・カウフマン女史を招聘し、大学院生を中心にマスタークラスを開催。カウフマン女史のレッスンは学生にとって大変貴重な経験となり、また私自身、自分の先生である彼女のレッスンを通訳することで、自分自身が教える立場となった今だからこそ学ぶべきことや、教えるアイデアや技術など、彼女から本当にたくさんを学ぶことが出来たことは、私にとって大変大きな収穫であった。H31年度から始まる私が企画提案した少子化・入試対策の企画が上手く軌道に乗るよう、精一杯頑張りたい。 |
| 声楽 | 准教授 | 初鹿野 剛 | 大学運営に於いては、前述の通り、教職員や関係業者各位のご尽力、ご協力のお蔭で諸業務を遂行することが出来た。今後も、関係する方々のご意見を聞き、真摯な業務遂行に取り組みたい。また、教育活動においても、学生のニーズと、国内外の声楽教育、オペラ教育の中で現状本学でやらせなければならないのは何かをより明確にし、教授法のさらなる改良、必要に応じてゲストスピーカー等の招聘も行っていきたい。 |
| ピアノ | 教授 | 松本 総一郎 | 本学法人化以降、大学運営や教育への負担が増え続けていく中で、如何にして自身の研究時間を捻出し、自分の研究を続けていくのか、大学業務との板挟みの中で試練の日々が続いている。 |
| ピアノ | 教授 | 熊谷 恵美子 | 自身の研究と教育、大学に関わる運営、社会貢献のどれも私にとっては大切なものであるが、どれも十分ではないのが現状である。特に教育面に関しては、研究との関わりを深めていきたいと考える。 |
| ピアノ | 教授 | 北住 淳 | 本年度から博士後期課程の教育・研究・運営活動に携わることとなり、より高度な本学での諸活動が望まれていること、それらに真摯に対応する姿勢が求められることを実感している。学生のより積極的な音楽への対峙と体験を導いていけるよう今後もつとめたい。 |
| ピアノ | 教授 | 掛谷 勇三 | 様々な運營業務で日々時間を取られ、研究の成果は目標とした水準には至らなかった。自身が演奏表現を行うことで、実技授業における指導内容をより充実させることができると明確に認識できた。研究活動を犠牲にして大学運營業務に非常に多くの時間を費やした過去14年間を深く反省し、残りの在職期間は研究に専念する。 |
| ピアノ | 准教授 | 内本 久美 | 自身の研究活動を大学での教育や一般の方のための演奏会など、より有意義な形で還元できるよう努めた。 |

H30年度 総括コメント（音楽学部）

| 専攻・コース名 | 職名 | 氏名 | 総括コメント |
|---------|-----|--------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ピアノ | 准教授 | 鈴木 謙一郎 | 特別研究でのロシアンピアノリズムの授業では、ロシアの作曲家、演奏法だけでなく、文化、歴史まで幅広い研究を学生と共に深く掘り下げる事が出来た。またその研究を、NHK文化センターのレクチャーで一般の方々にも伝えられたのは音楽のすそを広げる意味で意義があったと思う。今後はロシアンピアノリズムのピアノの音色、また作曲家の晩年の作品の研究を行ってきたい。 |
| ピアノ | 准教授 | 中尾 純 | 自身の研究ではJ. S. バッハの平均律クラヴィーア第2巻（全24曲）演奏会を完遂した。教育にかんしては古典派ソナタへの学生の取り組みに著しい進捗を確認できた。大学運営においてはとくに、演奏委員長として演奏会関連の研究・修学環境改善に熱心に取り組んだ。 |
| 弦楽器 | 教授 | 福本 泰之 | 教育・研究面、特にアンサンブル系の授業では、愛知芸大の歴史の積み重ねとレベルの高さを学外に示すことができ、大きな成果があった。反面、運営面では相変わらずかじ取りの難しさを痛感する場面もあり反省点も残った。 |
| 弦楽器 | 教授 | 花崎 薫 | 長年の活動として行っている、弦楽四重奏のコンサート、レコーディング、順調に行われた。門下の学生が重要なコンクールでの受賞、また提携大学への留学など頑張っている。今年度の一番の評価事項としては、尾高忠明氏を学生オーケストラの指揮者としてお招きできたことだと思う。氏の指導により学生オーケストラがかつて無いほどの素晴らしいコンサートを行った事は評価に値する。 |
| 弦楽器 | 教授 | 白石 禮子 | 研究活動としての演奏会の他、教育活動でも、指導した学生が卒業試験や学外コンクール、学内外のオーディションにて優秀な成績を収める等、研究・教育の両面に於いて成果を残した。社会貢献の部分では、複数のコンクール審査員、公開レッスン等の活動を行った。 |
| 弦楽器 | 教授 | 桐山 建志 | 昨年度同様、特に研究活動では大きな成果をあげることができたと思う。 |
| 弦楽器 | 准教授 | 渡邊 玲雄 | 赴任一年目ということで、どの授業も試行錯誤しながらの取り組みであったが、徐々に自分のペースをつかめるようになってきました。同じコースの先生方と協力しながら良いチームワークで様々な案件に議論し、結果につなげることができたと思います。広い視野で大学のためになる取り組みを数多くできるよう努力していきたいと思います。 |
| 管打楽器 | 教授 | 倉田 寛 | 今年度は総合的に見ても教育、運営委、研究のバランスが良く、積極的に活動できたと思う。特に社会貢献に於いては、本学の拠点である長久手市と大きな関わりが出来、長久手市文化の家との共催企画（東京佼成ウインドオーケストラ、長久手市文化の家、愛知県立芸大管打楽器コースの三者共催事業）が実現できた事は、正に地域との連携から国内外に発信できた音楽イベントだったのではないかと判断できる。結果に結びついた充実した年度であった。 |
| 管打楽器 | 准教授 | 深町 浩司 | 打楽器奏法の新たなメソッドを開発できたこと、そのメソッドによって学生への教育効果が出ていることなどから、総合的に高く評価できる。 |
| 管打楽器 | 准教授 | 橋本 岳人 | 研究活動では、多くのオーケストラで首席客演奏者を務めた他、室内楽、ソロ活動、海外国際音楽祭参加とバランス良く行う事が出来た。教育活動では試演会を頻繁に開催。学生達が切磋琢磨し、実技試験やコンクール等に良い効果をもたらした。マスタークラスにはコフラー氏を招聘し、学生達は多くの刺激を受けることが出来たと思う。また昨年度は多くのフルートコンクール、吹奏楽コンクールの審査員を務め日本音楽界に貢献することが出来た。 |

H30年度 総括コメント（音楽学部）

| 専攻・コース名 | 職名 | 氏名 | 総括コメント |
|---------|-----|-----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 管打楽器 | 准教授 | トン・ブルックス・ ノボ | 一年目でしたので、委員会など初体験のこと多かったです。見習いながらちよつとづつ慣れてきています。今年度は海外での国際講習会をいくつかおしえに行き、愛知県立大学の学生も連れて行きました。良いになったと思います。海外からゲストアーティストも数名来ていただいて、マスタークラス行いました。学生のレベルの高さに驚かれています。今後も積極的にこういう機会を設けていきたいと思っています。 |
| 管打楽器 | 准教授 | 井上 圭 | 初年度という事もあってか、慣れない事が多く、研究、教育、社会貢献など全ての面でさらなる研鑽の必要性を感じた1年であった。 根本的には実技を伝える業務内容であるため、自己研鑽の重要性をオーケストラに所属していた頃よりもさらに強く感じた。それと同時に学校運営に関わる事務作業と、研究との両立の難しさを痛感した。今年の経験を次年度以降に生かして次年度以降さらに社会に貢献していきたい。 |
| 教養 | 教授 | 水野 留規 | 従来の研究・教育活動を発展させることができたが、名古屋日伊協会や日本学生支援機構との連携など新しい試みに着手するもできた。日本語・日本文化の領域に研究対象を拡げることができ、これを本学で担当するイタリア語・外国文化史の講義や海外協定校との国際交流の充実・発展に繋げていきたい。 |
| 教養 | 教授 | 三宮 敦生 | 教育面では、授業アンケートの結果より、学生が十分に満足する授業ができたと思われる。研究面では、前半は感覚記憶の研究、後半は記憶の発達について授業にも役立つような知見をあれこれ吸収することができた。大学運営面では、図書館業務に対する理解が大幅に深まった。社会貢献では、夏休みに本学で開催された、『親子孫でくたのしい(仮説実験)講座』の運営・実施に尽力し、学外から約80名の参加者を得て、成功裡に終えることができた。 |
| 教養 | 准教授 | 井上 彩 | 研究：科研費による助成のおかげで学会・研究会発表5件、論文3報と研究を進めることができたがなかなかまとまった時間を確保できず大規模なプロジェクトが滞っている。次年度は科研費による助成の最終年度であり計画に沿った研究成果が出せるよう研究のための時間を確保したい。教育：英語の授業の履修者数超過を解消して以来教育環境が改善し、学生の授業外学修（予復習）の精度の向上を実感している。今後は学生がより能動的に授業に取り組める授業進行を目指す。大学運営：委員会を通じてできる限り取り組んだ。 |
| 教養 | 准教授 | 大塚 直 | 平成30年度は、科研費を取得して、現代社会に通じる移民・難民問題について、精力的な研究活動を行うことができた。また、ナチ時代に亡命生活を余儀なくされたユダヤ系の音楽家に関して研究成果の一部を、「プレヒト・詩と音楽の夕べ」と称して芸術講座を行い、本学学生の生演奏を交えながら広く市民に紹介した。 |
| 教養 | 准教授 | 中根 多恵 | 研究活動では、新しい事例研究に取り組みはじめ、調査と並行しながら学会報告と論文投稿をおこなってきた。教育活動では、履修生のニーズに沿いながら興味関心を引き出すための指導方法を追求し、授業展開の工夫に努めた。大学運営では、担当する委員会にすべて出席し、学内外の状況把握に取り組んだ。 |
| 教養 | 准教授 | 三品 陽平 | 研究活動、教育活動、大学運営に関しては、おおむね目標を達成、あるいは達成に向けて前進することができた。社会貢献については、窓口を広くするなど、さらなる取り組みに着手していきたい。 |